

—鎌倉市中央図書館ミニ展示—

かま くら と ほう そう てんねんとう 鎌倉と疱瘡(天然痘)

2008年5月1日～(木)～7月31日(木)
鎌倉市中央図書館 3階展示コーナーにて



嘉永3年頃の牛痘引札 部分

かつて「疱瘡」は地球上の人々を悩ませる重い伝染病でした。現在では種痘の普及により、WHOが「世界疱瘡根絶」宣言(1980年)を出し、人々の記憶から消えかかっています。しかし長い間、子どもたちを病から守り、無事に育てるために親たちは、今では想像できない苦労や心配をしました。その祈りの習俗も少しですが残っています。当時の人々の病に立ち向かう姿にふれてみたいと思います。

疱瘡(天然痘)を知っていますか?

疱瘡(天然痘)とは、「痘瘡ウイルス」によって起こる伝染病です。痘瘡ウイルスが口や皮膚の小さな傷口から体の中に入って発病します。始めに40度くらいの熱が続き、頭や腰が痛くなります。次に体中に吹き出ものが出来、それが水ぶくれになり、真ん中がくぼみ、やがてうみを持ちます。その後かさぶたからあばたになります。あばたは病気が治っても一生残りました。感染力が大変強く、死亡率も大変高かったため、古代から多くの人々が犠牲となりました。

疱瘡は、インドから仏教の伝来とともにシルクロードを伝って世界中に広まったと考えられています。日本では、奈良時代の文献に疱瘡と考えられる最も古い記述が見られます。明治時代まで、大流行をくり返し多くの文献に記録が残っています。

1796年にジェンナーの発明した種痘の普及により、疱瘡は完全に予防されるようになりました。

1958年からWHOを中心に、痘瘡根絶計画が推進され、その結果、1980年5月8日、WHOは「世界痘瘡根絶」を宣言しました。

「疱瘡」の呼び名について

奈良時代には『続日本紀』に「^{わんづかさ}豌豆瘡(俗名^{もかさ}裳瘡)」という言葉がみられます。また『文徳実録』に「疱瘡」という呼び名があり、その頃から使われています。鎌倉時代には「イモカサ・モガサ」、江戸時代には「イモ・ハウサウ」という俗称が使われたようです。明治時代には「天然痘」が公式用語として用いられ、現在でも一般的に使われていますが、第二次世界大戦後に厚生省は「痘そう」を公式用語として定めています。

主な展示物(*印は主な展示物です)

- *本間玄調著 臨床記録『種痘活人十全弁』部分 弘化3(1846)年
- *香月牛山著『小児必用養育草』正徳4(1714)年 中村光夫氏蔵
- *志水軒朱蘭著『疱瘡心得草』寛政10(1798)年 中村光夫氏蔵
- *「雙筆五十三次 舞坂 旅するごぜ図」広重・豊国画
安政2年(1855)年 中村光夫氏蔵



写本「痘疹口訣 巻5」より
享保3(1718)年 中村光夫氏蔵
中国で描かれた疱瘡罹患児童の
顔面図です。



浮世絵「きたいな名医難病治療」
国芳画 弘化4(1847)年ごろ
中村光夫氏蔵
女性が皮製の面を着けて、アバタ
をふやかしています。

疱瘡を防ぐ

今では、疱瘡はウイルスの感染によって起こる伝染病とわかっていますが、病原体の発見のほとんどは20世紀になってからでした。日本では古来より、神や悪霊の祟り、気象の影響、国の政の誤りなどによって疱瘡が起こると考えられていたため、疱瘡を防ぐために神や仏に祈り、時には廃朝や改元などが行われてきました。

医学的な治療としては、奈良時代に隋・唐から輸入された医説（薬療法、食療法、病後処置など）がそのまま江戸時代まで続いていたと考えられます。

また鎌倉時代には、子どもが母親のお腹にいるときに与えられた悪影響が原因であるという考え（胎毒説）が中国から伝わり、江戸時代に至るまで信じられていました。

江戸時代になると、中国から疱瘡専門の治療法や治療書が伝えられ、日本にも痘科という疱瘡を専門に扱う医師が誕生し、治療法も進歩しました。一方、元禄の頃から「疱瘡神」という新しい神が創造され、疱瘡を防ぐための多くの習俗が生まれました。赤色には魔力や薬効があると考えられ、衣類や玩具、見舞い品など様々なものに使用されました。

・医師と医学書

中国では元・明の時代によく痘科の専門家を名のるものが増え、専門の治療書も多数出版され、日本にも大きな影響を与えました。また、諸家の論説が活発化し、それに基づく治療法が数多く行われました。「酒湯^{ささゆ}」と名付けられた日本独特の治療法も新たに生まれました。

承応二（1653）年には明から戴曼公が長崎に来朝し、治療法を伝え、これにより日本にも痘科が独立し、代々「痘家」を家系とするものが現れました。

・種痘

種痘とは疱瘡に対する予防接種です。種痘には「人痘種痘法」と「牛痘種痘法」の二種類があります。

「人痘種痘法」とは、痘瘡患者の膿疱から痘漿（うみ）や痘痂（かさぶた）を採取し、これを健康な子供に接種して人工的に軽い痘瘡に罹らせて、二度と罹らぬようにする方法です。しかし、この方法は、危険性が高く、効果が不安定であり、また新たな感染源ともなるため、痘瘡の予防接種としては不完全な方法でした。

1796年にイギリスの外科医ジェンナーにより、安全で効果の高い「牛痘種痘法」が発明されました。

日本では、文正7（1824）年、蝦夷地の番人である中川五治郎によって初めて牛痘接種が行われましたが、蝦夷地と東北の一部の限定された地域であったため、あまり広まりませんでした。

嘉永元（1846）年にオランダの官医オットー・モーニッケが牛痘苗をもたらしました。佐賀藩医榎林宗建は、モーニッケに学び、翌年わが子に接種して善感し、以後『牛痘種痘法』が急速に普及しました。

日本での牛痘種痘の普及に貢献した蘭医には、江戸に種痘館を建てた伊東玄朴、大阪で適塾を開いた緒方洪庵、肥前大村藩の長与俊達、幕命を受けて蝦夷地で種痘を施した桑田立斎などがいます。

* 桑田立斎著『牛痘發蒙』嘉永2（1849）年 中村光夫氏蔵

* 宮地恵（明義）著『妙薬奇覽』嘉永4（1851）年 中村光夫氏蔵

* 『錦囊智術全書』嘉永ごろ 中村光夫氏蔵



香月牛山著『小児必用養育草』
正徳4（1714）年 中村光夫氏蔵



廣瀬元恭著『新訂牛痘奇法』
嘉永2（1849）年 中村光夫氏蔵



牛痘引札「江戸桑田立斎版」春亭画
嘉永3（1850）年 古河河口家蔵

鎌倉と疱瘡

鎌倉でも疱瘡は、子どもがかかる恐ろしい病気でした。様々な民間療法が行われていたと思われませんが、明治8年には関谷村で立て続けに3人の子どもが亡くなったと日記に記されています。

鎌倉に「種痘所組合」が出来たのは明治7年2月です。明治8年に「長谷寺」内に種痘所が設けられました。

江戸時代の『相模風土記』には、長谷寺や高德院境内に「疱瘡神」が祀られていたと記録されています。怖い「疱瘡」の神さまを丁重にお迎えして軽く済ませ、またお送りするという祈りの風習がありました。

・吾妻鏡に見る疱瘡

建久3年（1192）十二月廿日

二代将軍頼家（幼名万寿・当時十歳）が疱瘡を発病。

正元2年（1208）

二月三日 三代将軍実朝（当時十七歳）が疱瘡を発病し、鶴岡宮に出御なし。

二月廿九日 将軍家病氣平癒し、沐浴をする。

嘉禎元年（1235）十一月十八日

四代将軍藤原頼経（当時十八歳）が疱瘡発病。様々な祈祷が連日行われる。

・長与専齋（1838～1902・天保9年～明治35年）

幕末明治期の医学者、長与専齋（ながよせんさい）は、いち早く鎌倉の海を海水浴の適地として推薦し、保養所「海浜院」（ホテル）の建設に指導的な役割を果たした人です。故郷大村藩の藩医をつとめた父祖は「痘家」として藩内の痘瘡治療にたずさわり、専齋も一時期家業に就きました。若きころ、緒方洪庵の適塾で学び、さらに長崎で蘭医ポンペに学んだ専齋は、明治4年岩倉使節団に随行、欧米の医学教育を調査し、明治8年より内務省衛生局長をつとめました。衛生局の最初の仕事は、「牛痘種継所」の事業であったということです。

・鎌倉の習俗聞き

西御門・大蔵（大藤ゆき『鎌倉の民俗』より）

戦前まで疱瘡パーサンといって、暮の餅つきどきに乳房のような形の餅を一つつくり、頂点をちよつとつまんで紅をつけた餅を、大晦日に神棚の疱瘡神に供えて種痘が軽くすむように祈願した。暮には子どものいる家では、疱瘡パーサンを菓子屋に注文していた。種痘がなおると、サンダラボッチに米と大豆を煎ってふかしたものをのせ、それを一つまみ子どもの頭にふりかけ、笹でお湯をふりかける。あとサンダワラは庚申様におさめる。

八雲神社にあった石台（大藤ゆき『鎌倉の民俗』より）

大町の八雲神社の境内に屋根と台石だけの疱瘡稲荷がある。昔は、子どもに疱瘡を植えたときには、早くつきますようにと、梅干一つと赤い御幣をサンダワラに乗せて、疱瘡稲荷に供えて祈願した。

*上町屋のほうそう神さま/笹田のほうそう神送り

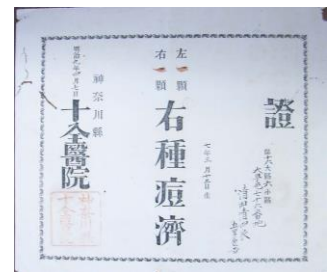
・鎌倉の疱瘡神

疱瘡老婆さんの石（鎌倉材木座五所神社境内）

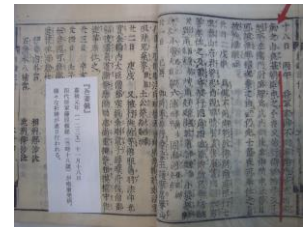
もとは補陀洛寺裏手にあった「みるめさま」に置かれていた。見目さまの境内にほうそうばあさんの石という石がまつてあって、ほうそうがはやっている、その石におまいりしたり、石に身体をふれさせると、その災難からのがれられるというので、石をさすったり、なぜたりするものが絶えなかつたくらいで、わしらもそんなことをした仲間だネ。

（鎌倉市教育委員会編『としよりのはなし』より）

*逗子市 池子神明社境内「疱瘡守護神」/三浦市 原稲荷神社「現在も行われている疱瘡神祭」



種痘濟證（大町 清田昌弘氏所蔵）



『吾妻鏡』
四代将軍藤原頼経疱瘡発病。



長谷の高德院境内に建つ
「松香長与先生紀功之碑」



疱瘡老婆さんの石



十二所神社石祠（写真左）
木札に「疱瘡之神」と墨書。

中村光夫氏コレクション

今回は、市内在住の小学校教師中村光夫氏が収集された資料の中から、
疱瘡に関する書籍・錦絵・幟・疱瘡玩具などを展示致しました。

中村光夫氏略歴

1943年、世田谷生まれ。埼玉大学教育学部で日本の近代教育史を学ぶ。
東京都内小学校で教える。郷土教育全国協議会会員。

・疱瘡幟

疱瘡の快癒や子どもの健やかな成長を願って幟を立てられました。

・疱瘡の神仏図

疱瘡を避けるために、様々な神仏が祀られました。

・疱瘡玩具

郷土玩具には、子どもを疫病から守り、発育を念ずるために護符として
用いられたものが多くあります。

だるまや人形、絵本など、疱瘡のお見舞いとしても用いられました。

・護符

紙に神仏の名や形像、呪文、経文、密教の種子、真言、神使とされて
いる動物などを書いた札を身につけたり、壁に張り付けたりしておく
と災厄を避けることができると考えられていました。

・疱瘡赤絵

赤絵とは赤摺りの錦絵で、はじめは痘児の慰めに用いられましたが、
後には疱瘡除けの護符として盛んに流行しました。

・鎮西八郎為朝

為朝が八丈島に流された時、為朝の武威を怖れて疱瘡神が上陸出来ず、
それ以来、八丈島には疱瘡が発生しなかったと考えられていました。

その為、為朝を祀り、為朝の錦絵を貼ることで疱瘡除けになると信じ
られ、広く行われていました。

* 節句幟「疱瘡神 大八木氏」(新潟地方) 万延元(1860)年

* 奉納幟「疱瘡善神」(新潟地方) 江戸時代

* 軸「妙正大明神像」(山梨・一乗寺) 江戸時代

* 了雲斎画「赤鍾馗像」慶応3(1867)年

* 護符「湯尾峠御孫嫡子 はじめ茶屋」

* 護符「疱瘡神真言」江戸時代

* 鴻巣赤物玩具「熊乗り金太郎」江戸時代

* 鴻巣赤物玩具「天神像」明治時代

* 岡山鳥識・勝川春扇画「疱瘡絵本」江戸末期

* 広重画「観音靈験記 湯尾峠の奇談」安政6(1859)年

* 山挙画 牛痘引札「大阪 除痘館 大和屋喜兵衛版」嘉永3(1850)年

* 貝「鎮西八郎為朝」

参考文献

『日本疾病史』 富士川游 1911年

『埼玉の種痘医展 展示資料目録』中村光夫 2005年

『病いの克服 日本痘瘡史』 川村純一 1999年



節句幟「金太郎と熊の図」明治時代



鴻巣赤物玩具と護符



国芳画「鎮西八郎為朝」江戸末期



「赤色御幣」江之島神社辺津宮
平成15(2003)年
「棧俵」新潟 昭和時代